

ふるさと見て歩き

第53回

高長寺の 一字一石経

◆市内唯一の 十六羅漢

高長寺は、横瀬村（現鷹巣地区）に寺院がなかったのを憂えた二代藩主光圀により、天和三年（一六八三）に石神村（現東海村）長松院より移されました。

目黒の五百羅漢寺などが有名です。市内では高長寺が唯一の十六羅漢の寺です。現在は十六羅漢のうち半数近くが破損していますが、背面にはそれぞれの尊名が刻まれ、台座や持ち物なども十六体がすべて異なった像容をしています。

十六羅漢には年に四回（春秋彼岸、七月及び十二月第二日曜日）、「お洗い」と呼ばれる行事があります。高長寺婦人会二十名ほどが集まってお参りしたあと、十六羅漢を洗い浄めるもので、そのあと、寺で飲食をして和やかに過ごします。



▲高長寺本堂

この高長寺の寺宝の一つに文政九年（一八二六）年に造立された石造の十六羅漢と釈迦如来坐像があります。

「羅漢」とは仏教の世界で修行中の聖者を指し、そのうち十六羅漢は「おびんずるさま」として知られる貧頭盧尊者以下の十六名の修行者とされています。また、釈迦の五百人の弟子は「五百羅漢」として知られ、東京



▲十六羅漢

◆一字一石経の掘り出し

この十六羅漢の中尊（中心となる像）である釈迦如来坐像の台座には銘文があり、高長寺十五世の月山梅照が羅漢像の造立を思い立ったことや、その完成までの経過を詳しく記すと同時に、地下に一字一石経（小石に一字ずつ経文を書いたもの）六万九千個が納められていることや

人々がそれに使う小石を集めた様子などが刻まれています。

昨年十月、貴重な文化財であり、寺宝でもある一字一石経を守り伝えていくため、高長寺と檀家の人々によつて一字一石経の掘り出しが行われました。掘り出された一字一石経はおよそ二万個。重さは二・五トンに及びました。もともと十六羅漢は、現在地より100mほど南に安置さ



▲掘り上げられた一字一石経

れていましたが、大正期頃、河川改修に伴って高長寺境内に移されたといわれています。この時既に、十六羅漢の下に一字一石経が埋まっていることが判明し、十六羅漢の移動先の地下に、桶に入れて再び埋められたことも伝えられていました。こうして、移転の際にも一字一石経は羅漢と離れることなく地下に納められたのです。

経石には久慈川の河原から拾い集められた5cmから10cm径の平たい石が選ばれました。この石一つ一つに

墨で経文の一字が書かれています。書かれている文字から、「大乘妙典」や「般若心経」、「観音経」といった経文の文言が記されていると推測されます。

釈迦如来坐像の台座刻銘によれば、同時に作られた十六羅漢も村人の寄付によるものでした。十六羅漢、一字一石経の作られた文政九年頃は天災が続発し、水戸藩の圧制に村人たちが苦しめられていたとされます。確かに水戸藩領では、十八世紀後半以降、度重なる飢饉により、貧富の差が拡大し、人口が減少、田畑の放棄が進み、年貢負担も増大するという状況に追い込まれていました。

そのようななか、人々は、少しでも生活をよくしたいという願いを十六羅漢と一字一石経に託しました。二万個の石は、二百年前の人々の現世・来世への願いを私達に見せてくれます。



▲一字一石経。「道」「人」などの字が見える

※高長寺住職石崎信昭さんに聞き取り調査にご協力をいただきました。

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450